



同志社人物誌 (69)

竹中勝男先生 私の追憶のなかで

— “同志社派” の検証として —

小倉 襄 二

の追憶の視点として常に先生を想うとこの絆に想到する。情景としては未だ戦後、先生も壮年、客気満々の気迫に充ちておられた。住谷悦治先生の覇気、思想、理論教示の痛烈さに圧倒された。物、資材は乏しくとも同志的な結果と熱気のようなものが研究所のムードとして昂揚し、そのリーダーシップの中心に竹中先生の抱擁力、よくいう懐の深いゆったりした人柄で、些事に拘泥せず日々ユーモラスな私たちへの対応がなつかしい回想になっている。

歳月の流れをへだてて、いま、竹中勝男先生への追憶を綴るとき先生とのふしぎな絆を想うこと切である。それぞれの生の歷程にはいまにして想えば決定的な分岐点ともいえる事実がある。一九五〇年に私は同志社大学文学部社会学科を卒業したが就職については当時の激動の時代を映してかぜひジャーナリスト、新聞記者と希っていた。その準備などをしていたが私がその志を撤回していまその職にある大学の教員へと導いてもらったのは竹中勝男先生のはげましと指示であった。当時、京都に社会福祉研究所という研究機関があ

り、先生の組織力でその研究調査活動があり、住谷悦治先生を研究主任として常勤、非常勤の研究者を集めて注目されとりくみを展開していた。この段階からこの研究所の助手として研究に参加したことが竹中勝男先生との「師弟」としての絆のはじまりである。竹中、住谷両先生の編著で『街娼―実態とその手記―』（有恒社 一九四九年十一月の刊行で占領下の売春問題についての調査研究としてまとめられたものも研究所の活動の成果であり大きい反響をよぶことになった。これはまことに私事にわたる先生との絆の一例であるが先生へ

人物誌にはどこかあいまいさがついてまわる。その人のなにを視ていたか、ある焦点は定まっても周辺はほけてくる。竹中勝男先生は私が助手として研究室で身近に接しているサイド、大学の教学、研究、若干の個人的なかわり、エピソードや輪郭はややくつきりしているが、先生の全体像は拡散してよく視えない。このあたりの条件は、個人差があるが竹中勝男先生は私などの焦点のきめた部分のごく限定されたもので未知のいろんなあつみのある可能性、領域をその分身を駆使して実に多元的な活動をされ実に独自の個性の持ち主であったと思う。

同志社大学人文学会の「人文学」(第四六号)

社会学科特集は故竹中勝男先生の追悼号として編集された。私などより長く深く竹中先生とのかかわりをもたれた嶋田啓一郎先生の「転換期の社会福祉論―竹中勝男『社会福祉研究』を中心として」巻頭論文である。嶋田先生は竹中先生の社会福祉研究における理論の位相ととくに戦後の社会福祉の理論、実践についての確な考察がある。その一節に「思想家とは、まことの死に場所を求めてゆく人の姿でなければならぬ、人はただに文献の著述によって思想家たり得るのではなく、その生涯の生活的実践を通して、彼の学究的態度の広さ、深さ、高さを実証する。思想は生活であり、学問はその人の死場所と深いかわりをもっている」と。私は、竹中先生への「鎮魂の辞」として感慨をもって読んだ。嶋田先生のこの一文の深い意味はわからないままに研究者の位相、いま、同志社のみならず、大学の「研究室の人と人の交流」のなかで地を払ってしまった発想としてこのコトバを読んだ。古風な表現であるが嶋田先生の竹中先生への哀悼の真情がよみとれる、一九五九年一月二十六日の朝、竹中先生は急逝された。

それは、社会党所属の参議院議員、同志社大学の大学院の社会福祉学担当講師としての死であった。嶋田先生の「死場所を得て」という表現は、竹中先生のこの晩年、とくに日米安保条約をめぐる時代と状況、思想や政策の激突、その只中での先生の死にむかっただのこトバとしてふさわしい。先生の略歴にみて、一九二〇年代に開始される先生の履歴の終結が嶋田先生の指摘される「死場所」の位置はこの同志社人物誌のなかでも独自の位相にある。先生は一八九八(明三一)年七月、長崎県平戸に生を享け、一九二一年同志社大学神学部卒、二三年、シカゴ大学文学部卒、さらに、二四年ローチェスター大学を卒業し、母校同志社大学文学部講師、助教授、教授に就任、主として、社会政策、社会事業研究、社会問題などの講座を担当された。一九三〇(昭五)年に文学部神学科に社会事業専攻が設置された。後に戦中期、一九四四年に文学部文学科厚生学専攻、さらに厚生学科として独立、敗戦後の混乱のなかで先見、行動力を発揮して一九四八年に文学部社会科学の創設、学科運営の中核として働かれた。五〇年に文学部長、文学博士の学位を受けられた。これ

は、同志社人脈としては稀有の例として、さきに述べたように当時の激烈な政治状況のなかで鈴木茂三郎、浅沼稻次郎氏ら社会党の強い要請のなかでついに参議院議員に立候補、当選し苛烈な議政壇上の責に任ぜられて未だ業成らずして逝去された。同志社大学、社会学科、そして社会福祉学の今日在ることの礎石は竹中先生によって据えられたといつても過言ではない。

私は、先生の社会福祉理論は、いま、あらためて再評価、現実への響導性をもつと考えている。先生の同志社大学在任中に展開された戦前、戦後の理論展開を詳細に検証する意図はない。先生の生涯、その節目のなかに、私たち同志社の社会福祉研究と教育、実践の源流でもあり、先生の思考、アイデアのなかに連続、不連続、さらに是非を問いえぬが一つの脈絡と系譜を再発見することになる。

新島襄の創学の思想、キリスト教主義、平民主義、私はキー・ワードとして同志社の立学と学統には「底辺にむかう志」ありと考えてきた。ここに一つの日本の近・現代に同志社が発信し、それ故に同志社存立の根拠ありとも考えてきた。わが師、竹中勝男先生は、

その学統、系譜のなかにもっとも枢要の位置にある人物であった。また、同志社が「福祉的なもの」に干与し、その形成に深甚なる関連を保持したが故に竹中勝男先生を抜きにしてはわが国の近・現代、今日に至る社会福祉研究・教育・実践は語れないというべきである。

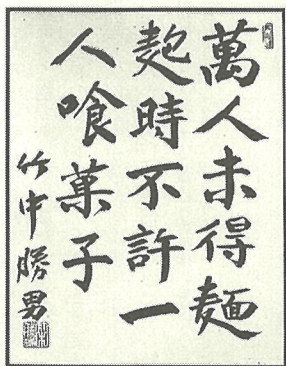
多くの叱正をうけながら、私は、この歴史とその精神史、思想史にとつて「同志社派」という仮説のなかで探求したものがあつた。人物誌でいえば、留岡幸助、石井十次、山室軍平の三巨峰、さらには、安部磯雄、八浜徳三郎、山本徳尚、牧野虎次ら簇々たる人物群像である。その他、こうした人脈につらなつて有名、無名の人傑がここにいう「底辺」にむかう志にうながされて近・現代の暗黒、「下層社会」にむかつてその生涯を傾注した。戦前、学究として竹中先生の周囲には、竹内愛二、大林宗嗣、嶋田啓一郎、中島重、住谷悦治の諸先生の研究、教育展開があり、その原点にはキリスト教の愛と信、それは、社会的基督教、労働者伝導にも拡張する社会問題、「底辺への志」につよくうながされるものがあつた。先生の研究展開については、さきの追悼号

に収載されている主著、多数の論文をふくむ文献目録は私が作製しその内容にも立入ることになった。社会福祉は戦後概念であつて、先生の主著というべも集大成は『社会福祉研究』（一九五〇年一月、関書院）である。この著作は、私が校正を担当した。地域集団とすべきをミス、地球集団のままに公刊先生から叱責されたこともありとくに想い出多い著書である。社会福祉学会の何人かの教授から、いま、あらためて竹中先生の旧著、『社会福祉研究』の再評価とすでに稀覯本となつた本書の復刻をとという声もある。何故か、竹中先生の思考は多元的で、福祉の解明のためにはさまざまの論証の系路、思想を選択して、固執、とらわれるドグマがほとんど感じられない。歴史意識と現実認識の媒介についても実に柔軟である。一九九〇年代に社会福祉の先端理論として主調されている論証もすでに竹中先生の本書のなかにすでに予見されている。とくに社会保障状況下における公的扶助、社会福祉サービスの機能、位置づけはきわめて明快である。戦後、先生の所論をめぐつての論争も提起されたが、理論レベルとして当時の先生の見識の高さ、いまだ腐朽しない思考、論証

としてこの主著は注目されている。占領下における社会保障、社会政策、とくにその一環としての社会福祉サービスへの政策原理について、社会事業を中心としてこれに接続する社会政策、社会保障制度が、扶助、保護、保障、保障の如きそれだけの方法によつて実現しようとする具体的目的に共通する一つの上位の目的概念を『社会福祉』として提示した。これは、当時、「竹中理論」として新しい福祉把握の枠ぐみであつた。いま、複雑多岐にわたる制度、サービスの諸機能、その仕組みを全体として集約する「福祉」という時代のキー・ワードが使用されているが、この竹中理論は現代にいまのマクロ理論にとつての予見的な理論枠ともいえよう。嶋田先生は、やや検証抜きに「社会民主主義理論に根差す社会福祉そのものの確立のための社会事業理論の成立すべき可能性を凝視」と竹中理論を要約している。私もこの要約には同感で、いま、世紀末をひかえてのマルクス主義社会主義理論の揺れのなかでマクロ、トータルセオリーの復権、理論史のなかで竹中理論モデルは決して過去のものとはいえない。

先生の論証は包括的、あいまいさ、概念の

構成についての多義性が未整理のままに放置されている部分もあった。たとえば、社会福祉とは「社会理念として人間の生活に望まれる安定、調和、生活内容の充実、人格の発展の如き (Gleichsaihkheit) の理想的状态である」と規定する。ここに鋭い社会科学派からの追求があった。当時、私も大河内一男、孝橋正一先生らの立脚点からこの社会哲学的規定のあいまいさについて批判の眼をむけたものであった。しかし、福祉の歴史研究について造詣の深い竹中先生は、福祉とは「人間の幸福追求の歴史的共同体験、その要求の組織化であり、制度化である」こうした規定と其の効果には、リアリティーのみならず、福祉の未来への確信がほのみえている。



嶋田先生の死場所論であるが、このことは実は、竹中先生の戦時下における思考、理論の動向に私はむすびつけて考えている。さきくに人文科学研究所で『戦時下抵抗の研究』(みすず書房刊)の共同研究があり、私もその一員として戦時下の厚生政策や事業について考察した。日本ファシズム下の社会事業の「変質」、それへの当時の研究者、イデオログの動きという側面である。竹中先生は、決してフアナティックな接近ではなかったが戦時厚生、人的資源論、戦力増強の一翼としての社会事業の戦時厚生政策への推転についての世界観をふくめての論拠をいくつかの論稿において抵抗不在むしろ状況への迎合的な立場にあった。これは、戦争責任の主題でもある。たしかにいま、なぜ、戦争責任か、なぜ、抵抗不在であったか、これは迎合と転向の昭和史の主題である。先生から私はこの戦時厚生事業のことについて伺ったことはない、戦後状況に即応して、先生の役割、行動は、はじめ抜きで主動的であった。しかし、さきの参議院への立候補、痛烈、繁忙をきわめる議員生活のなかで、キー・ワードとしての平和、護憲、福祉のために学究から政治実践者への転進を

通してめざましい活動で衆目に触れた、先生の内面にながが動いたかは知る由もないが、私には、どこかで、ついに戦争協力、戦時厚生政策へのイデオログとしての一時期のことが先生の暗部としてあって、それを一つのバネとしての活動と死処を得るといふ先生の終末がつかがっていたのではとの想いを禁じえない。

先生は、私のいろいろな意味で「同志社派」の大切な一人である。先生のキリスト教の信仰生活のことも私はよく知らない。私事にかえるが私たちは夫婦ともに先生のヒューマンで自由な、暖かい人柄に触れたことにつよい感動をもっている。いま。大学で死滅しつつある種族、名物教授の一人でもあった。日本人離れをした風貌と、大柄でゆつたりした先生、ときに癩癩玉を破裂させて怒鳴りつける野人奔放な一面もあった。

どうあろうと先生は多くの思想、実践者の福祉の系譜のなかでの同志社派のキー・パーソン、いい意味でのボス、その多元的な行動、思考、清濁あわせ吞む国士風のスタイルのためにさまざまの毀誉褒貶にも曝されるところもあった。私は先生の「不肖の弟子」として、

すでに先生逝去の齡を超えてしまった。茫々星霜の流れのなかで、稿を求められて懐旧の情とともにあらためて竹中勝男先生を想うこととせりである。先生の色紙に曰く、「万人未ダパンヲ得ザル時 一人、菓子ヲ喰ウヲ許サズ」と。至言である。

(大学文学部教授)

故竹中勝男博士略歴

一八九八年(明治三十一年) 七月二十七日長崎

県平戸市で生る

一九二一年 同志社大学神学部を卒業

〳〳 二三年 シカゴ大学文学部を卒業

〳〳 二四年 ローチェスター大学を卒業

〳〳 二五年 東京帝国大学文学部大学院に在籍

〳〳 二九年 同志社大学文学部講師に就任

〳〳 三二年 同 助教授に就任

〳〳 三六年 同 教授に就任(専攻、社会学・

社会政策・社会福祉学)

〳〳 四八年 同文学部社会学科の創設に貢献さ

れる。

〳〳 五〇年 同文学部長に就任、文学博士の学

位を授与

〳〳 五三年 参議院議員選挙立候補のため同志

社大学教授を辞任、参議院議員に

当選後、同大学大学院講師を継続、

日本社会党を代表し、スエーデン、

ストックホルムの国際社会主義大

会に出席、帰途欧州七カ国を視察

参議院文教委員長に就任、中国殉

難者遺骨送還団長として二度北京

へ派遣される

〳〳 五八年

参議院文教委員長に就任、中国殉

難者遺骨送還団長として二度北京

〳〳 五九年

一月二十六日午前七時五分逝去

役 職

日本社会学会、日本社会政策学会、日本社会福祉

学会理事

内閣社会保障審議会委員

日本社会党労働大学学監及び同党教育部長

同党国民年金制度調査委員会委員長

京都府社会福祉協議会理事

その他、日中友好協会、ユネスコなど諸団体の幹

事、理事を兼任

同志社談叢

第十号

論 文

新島襄晩年のところ……………竹中正夫

—その「畢生の目的」をめぐって—

新島襄の大学設立運動(一)……………河野仁昭

父・久永機四郎の記……………久永省一

—新島襄の小さき弟子の一人として—

山崎為徳詳年譜……………高橋光夫

高標元一郎の柏木義円宛書簡をめぐって

……………室田保夫

資 料

新島襄葬儀記録

亡愛夫妻発病ノ覚……………新島八重子

新島襄に関する文献ノート

(その八)……………河野仁昭

『新島襄全集 第五巻—日記・紀行編』

人名索引……………加茂正典

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八